



一日一前

校長室通信

第 17 号

平成30年9月12日

9月 — 救出 —



先月は、山口県の山中で2歳男児が行方不明になり、68時間後に無事保護されたというニュースに日本中が沸きました。大分県から来た小島春男さんという78歳のボランティアが、捜索隊が探していた場所とは別の場所で、捜索開始からわずか30分足らずで男児を発見しました。小島さんは以前にも2歳女児を発見し、「子供は上に行く習性がある」という知識があったことから、今回も発見することができました。

小島さんはボランティア関係者の間では有名な方で、これまで被災地での活動を重ねてこられた方です。今や時の人となり、テレビに出演することが増えていますが、浮かれることなく被災地のボランティア活動を続けています。テレビで「人生で他にやりたいことは？」と聞かれ、「定時制高校に行きたい」と答えているのを見て、私は小島さんという人物に更に興味を持ちました。

一昨年、私が上磯高校に勤めていたときも同じようなことがあり、隣町の山中で行方不明になった7歳児が6日後に発見されたことがありました。この時も、子供は上に向かった後、反対側の町に降りていき、山中の自衛隊演習場内にある隊員用施設に辿り着き、そこにあったマットレスの間に挟まって過ごしていました。7歳児が発見された日に、偶然、上磯高校で避難訓練があり、数名の消防署員が連日の捜索による疲労と発見されたという安堵の表情で来校し、その7歳児が風雨、飢え、寒さを防いで6日間過ごしたという話をいただきました。

幼児期・児童期前期の子どもは「同化」と呼ばれる体験から得た行動様式を利用したりして、「調節」と呼ばれる新しい経験にイドむようになる習性があり、この時期に同化と調節を利用しながら、行動を目的に合うように発達させていきます。おそらく山口県の2歳児は新しい体験にイドむようになる時期で、道南の7歳児はそれまでの体験から得た行動だったことが推測されます。

それでは高校生が含まれる青年期にはどのような習性（特徴）があるのでしょうか。青年期は「自分が何者かを探るアイデンティティーの確立時期」と「自分がどこに向かっていけばよいのか悩む時期」とされています。その答えが見つからず、眠れない夜を過ごす若者も多くいます。悩みの度合いが強すぎると、自己を見失い、自分が何者であるか分からなくなり、「自我同一性の危機」と呼ばれる状況となり、逃避傾向が出ます。さらに否定的な自我同一性を持った場合は、自己否定的なイメージから脱することができずに、逸脱的行動や自己破壊的な行動、また心の病に結びつきやすくなります。親、教師などの指導する人間は、これらの青年期の習性について理解した上で、「親身になる」「気持ちを聞き出す」「経験や情報を伝える」ことがまず必要です。

小島さんが「かけた情けは水に流せ、受けた恩は石に刻め」や「朝は必ず来るよ」という格言を自室の壁に貼ってあるのをテレビで見て、過去にサポートに対し感謝の気持ちが薄い生徒がいたときに「生徒にしてあげたことは水に流せ、生徒・保護者・地域から受けた恩は石に刻め」とベテラン教師達が若手に話していたのを思い出しました。そして、「朝は必ず来るよ」という言葉は、答えが見つからず、悩み多き、嵐の心を持つ高校生にかけられる最良の言葉と感じました。もし小島さんが定時制高校へ行ったならば、生徒の習性を探り、親身になって経験や情報を伝え、青年期の中で迷える高校生を救出できると感じました。

